

## 令和8年3月 月報

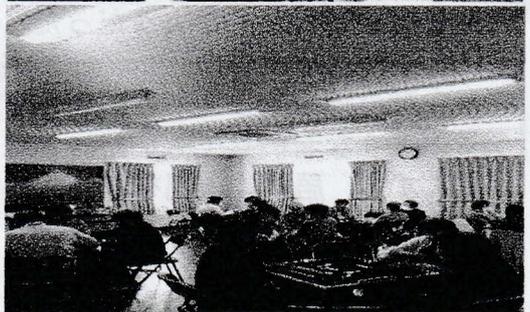
まだまだ春遠からじ、とは言え皆さんお元気でお過ごしのことと存じます。楽しんで健康、笑って健康、食べて健康、少しの運動が桜美会(楽園)の4原則です。皆さん(教)きょう(育)いく所は桜美会(楽園)じゃないでしょうか? {今月の行事予定は裏面参照ください。}

3・4月度月報で各種行事の紹介をさせていただきますのでどこかにまず一度参加してみましようよ?

◎この写真は1月27日(火)第3回誕生会の様子です。49名の参加を頂き12月～今年の3月生まれの方をお祝いしました。→その後唄あり、食事あり、ゲームありとそれは楽しかったと言って頂きました。



◎健康麻雀倶楽部です。ここの所ほとんどの日が6卓24名程の人が楽しまれています。しまった、またか、まんがんやとかの大声がひっきりなしに聞こえてきます。麻雀倶楽部は月4回 午後12時半頃より2階ホールに集まって来ますので先ずは一度お越しくださいませ ↗



◎モルック倶楽部です。モルックと言うスポーツをご存知ない方も多いかと思いますが、年齢に関係なく楽しめる競技です。上は80歳半ば～下は60歳です練習は月3～4回中央公園でしています。笑いっぱい倶楽部です。興味のある方は連絡ください現在の部員数40名で楽しんで居ます。遠征試合もありますよ



◎百歳体操です。百歳体操は毎週金曜日に行っています。第1金曜日は体操の後30分ゲームをしたりで楽しんでいます。第2と第4はクニちゃん体操(リンパ、血流を良くする体操)をしています。第3は何かを考えて楽しくやっています。



## 行事予定

	行事	日程	時間開催場所等
北	健康マージャン	3月4日(水)10(火)18(水)28(土)	12時30分～北集会所2階ホール
	いきいき百歳体操	3月6日(金)13(金)20(金)27(金)	13時30分～〇印は掃除クニちゃん体操
	折り紙教室	3月3日(火)	10時～北集会所1階和室
桜	うぐいす会	3月4日(水)18(水)	13時30分～北集会所1階和室
	お弁当会	3月9日(月)	13時30分～北集会所1階和室
	いきいきホール掃除	3月17日(火)	10時～いきいきホール(月報配布)
美	モルック倶楽部	ラインにて都度連絡	10時～中央公園にて
	カラオケ倶楽部	3月15日(日)	13時～カラオケ喫茶円
会	役員会①	3月14(土)	10時～12時 集会所 和室
<b>入退会</b>		<b>入会)</b>	<b>退会)木曾 淳子様 山口 須美子様 沖中 良子様 仙波 和代様 大山 芳夫様</b>

### [運命の足音] 五木 寛之 ③

(五十七年目の夏に)

1.一枚の写真 急いで組織をつくり、ソ連軍当局と交渉するなどというやりかたは、ほとんど念頭になかったようだった。その日の午後、私たち家族がすんでいた師範学校の舎宅に、突然、ソ連軍の兵士たちが姿をあらわした。彼らはマンドリン銃と私たちが呼んでいた自動小銃をかまえて家に入ってきた。なかには旧日本軍の南部式拳銃を手にしている少年のような若い兵士もいた。父は風呂にはいっている所だった。母は半年ほど前から体調をくずし、居間に布団をしいて寝ていた。私は風呂の横にいたのだが、なにおしていたのか、どうしても思いだすことができない。そのあたりから私の記憶は、フラッシュ撮影のように一瞬、鮮明になったり、消えたりする、幼い弟と妹がどこにいたのかも記憶にない。ソ連兵に自動小銃をつきつけられて、裸の父親は両手をあげたまま壁際に立たされた。彼は逃げようとする私を両腕で抱きかかえて、抵抗するんじゃない!と、かすれた声で叫んだ。悲鳴のような声だった。ソ連兵の一人が、私をおしのけて裸の父親のペニスを銃でつついだ。そして軽蔑したようになにかを言い、仲間と大笑いした。

それから一人で寝ている母親の布団をはぎ、死んだように目をとじている母親のゆかたの襟もとをブーツの先でこじあけた。彼は笑いながら母の薄い乳房を靴でぎゅうっとふみつけた。そのとき母が不意に激しく吐血しなかったなら、状況はさらに良くないことになっていただろう。あのとき母の口からあふれでた血は、あれは一体、なんだったのだろうか。病気による吐血だったのか。それとも口のなかを自分の歯で噛みきった血だったのか。まっ赤な血だった。さすがにソ連兵たちも驚いたように、母の体から靴をおろした。

彼らもようやく病人だと気づいたようだった。そして、二人がかりで母の寝ている敷布団の両端をもちあげると、奇声を発しながら運んでいき、縁側から庭へセメント袋投げるように投げだした。そのとき私はどうしていたのだろうか。大声でなにか叫んだ記憶があるが、その言葉はおぼろげでない、「かおさん!」と、叫んだようでもあり、また、「おとうさん!」と、叫んだような気もする。自動小銃を突きつけられたまま、私と裸の父親は身動きもせずそれを見ていた。やがてソ連兵は目ぼしいものをねこそぎ持ちさったあと、私と父親は母親をだいて庭から居間に運んだ、母はひとことも言葉を発しなかった。私と父親をうっすらと判目でみつめただけだった。やがて数日後に、その舎宅もソ連軍に接收され、私たち家族は母をリヤカーにのせて雨のなかを別な場所へうつった。

次号に続く